

横浜関帝廟重修25周年祭 (1910年7月) 現関帝廟通りをねり歩く行列

開港のひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行／横浜開港資料館 (財横浜開港資料普及協会)
横浜市中央区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
発行日／平成6年11月2日
印刷／株式会社 佐藤印刷所

落葉帰根から落地生根へ

「横浜中華街—開港から震災まで」

展に寄せて

横浜中華街の歴史は幕末の開港にはじまる。横浜に居留地が開かれると、多くの外国人が来浜し、その中には広東、香港、上海、長崎などからやってきた中国人の姿があった。彼らは多種多様な職業を営み、また中華会館、同郷団体、学校、病院、墓地といった社会組織を有するコミュニティを形成していた。こうした華僑の活動は経済・文化面などで横浜の街に様々な影響を与え、彼らが築いてきた中華街は、常に横浜の一つの顔でありつづけている。

いわゆる中華街とは、加賀町通り、本村通り(現中華街南門通りと中華街開港道)、前橋町通り(現中華街大通り)、小田原町通り(現関帝廟通り)の付近一帯を言うが、開港当初、この辺りは横浜新田といわれる沼地であった。

海岸通りや本町通りには欧米商館が建てられていたためであろうか、中国人は、本町通りの後方で元町につづく本村通りの付近に住むようになる。幕末にはこのあたりに同善堂という廟が建てられ、明治の初年には

関帝廟と会芳楼も存在した。一八六七年に一種の住民登録にあたる籍牌を受けた者は六六〇人で、五年後の一八七二年には一〇〇〇人あまりに急増している。このように続々と横浜を訪れた中国人は、同胞が暮らし、廟や劇場が建てられていた地域に集り、徐々に中華街というべきものが形成されていった。一八七七年の入籍名簿によれば、在住中国人一、一四二人のほぼ半数が、いわゆる中華街地区に居住していた。

華僑の人々は横浜居留地で様々な職業を営んでいた。欧米商社の買弁だけでなく、貿易商や両替商などの商店を開いていた。また西洋建築や塗装、印刷、家具や楽器の製造、食料品の製造、洋服などの仕事を行ない、彼らの活動は居留地の欧米商館の営業や、居留地に暮らす人々の日々の生活を支える重要な意味を持っていた。また華僑貿易商は、海産物・乾物・砂糖などの輸出入を通して、横浜と香港・台湾などのアジア各地を結んでいた。

一八九〇年代の前半には、横

浜華僑社会の充実を象徴するかのようになり、中華会館の改築、関帝廟の拡張、中華義荘の修復が、横浜華僑の寄付金を集めて行なわれる。しかし、一八九四年には日清戦争が勃発し、一八九九年には条約改正にともない居留地が撤廃され、その中で中国人の内地雑居問題が起こる。また、一九二三年九月一日には関東大地震が発生し、中華街は倒壊と火災による壊滅的な被害を受けた。震災によってかつての中華街は姿を消してしまっただが、復興とともに横浜に戻る人々も増え、再び街は活気を取り戻していく。

横浜華僑社会は幕末の開港期にはじまり、日清戦争・関東大地震といった戦争・災害の苦難に遭いながらも、成長し続けてきた。その過程は、故郷に亡骸を送り返したことに象徴される「落葉帰根(葉が落ちれば根に帰る、すなわちいずれは故郷に帰る)」の時代から「落地生根(地に落ちて根をはやす、その地に根をはって生きる)」への道程であった。今回の展示では、主として開港から関東大震災頃までの横浜華僑の歴史を、経済・政治・文化・教育・風俗といった観点からあつづける。

(伊藤泉美)

「横浜中華街」 展出陳資料から

今回の展示開催にあたり、国内外の諸機関のご協力により、各地に残されていた横浜華僑に関する資料を集めて展示することができた。ここではそうした資料の中から浮かび上がった、二人の横浜華僑貿易商について紹介したい。

永安和主人呉植垣

永安和の主人呉植垣は同治二年（一八六三年）七月二〇日、広東省南海県に生まれ、字は廷奎と言う。父厚祥は郷里で雜貨商を営んでいたが火災にあつて家産を失った。呉植垣はその後父母を亡くし、二一歳の時奮起して横浜を訪れ永安和を開いた。永安和は美術品・工芸品のほか、海産物・絹織物の輸出、砂糖・洋酒・茶・煙草などの輸入に従事していた。ジャパン・ディレクトリーによれば、一八八五年には居留地七一番地で開業しており、一八九一年に同五六番地に移転している。

ただし、『横浜貿易新聞』明治三二年一月二三日号の商号登記広告によれば、この永安和の主人は盧冠廷（住所は清国広東省廣州府香山北山村）となっており、同号の支配人が呉植垣と登記されている。このことから、永安和の経営主は盧冠廷であるが、実質的な営業者は呉植垣と考えられる。

その後永安和の営業が順調に進んだのであるが、呉植垣はやがて永安和を開いた。ジャパン・ディレクトリーによれば、永安和は一九〇五年版から一九〇六年版までは二〇一番地に、一九〇七年版以降一九二三年版までは二〇番地に記載されている。

永安和は日本橋貴金属美術商、吉沼又右衛門を主な取引相手とし、美術品以外にも香水などの輸出を行ない、神戸とバンコックに支店を設けていた。

神戸支店は広興昌で支配人は廖道明と言ひ、神戸市栄町一丁目九九番地に所在した。またバンコック支店は徳和隆と称した。

呉植垣という人物は商才に長けていただけでなく、華僑社会内での人望も厚く、横浜大同学校の設立、中国人内地雜居許可への請願運動、横浜華商會議所の創設などにあたり、常に中心的役割を果していた。とりわけ、華商會議所の設立時には総幹事に就任し、華商會議所が横浜中華商務總會となった後、一九一三年には総理に推挙された。

こうした一連の活動の中で、呉植垣は日本人の政治家・実業家である柏原文太郎との交流を深めていく。柏原文太郎は早稲田大学の前身、東京専門学校出身で、大養毅・大隈重信、近衛篤磨らと親交があり、東亜同文会の結成

に参与した人物である。また康有為・梁啓超らの亡命中の世話人を務めたことなどの事情により、横浜・神戸の華僑と交流が深かった。

一九一一年、永安和のバンコック支店徳和隆は神戸支店の広興昌から輸入した香水を販売したところ、バンコックのフランス商館金鶏洋行から商標侵害として訴えられる事件が起きた。この裁判にあたって呉植垣は柏原文太郎を代理人とし、裁判に要する一切の法律行為、日本政府との交渉などを委任している。その委任状が図2である。

この裁判以外の件でも、

柏原と呉植垣、神戸支店の広興昌との間では、生糸の買付け、株式購入の依頼などについて手紙がやりとりされていた。このように、永安和（横浜）を軸にして、広興昌（神戸）と徳和隆（バンコック）といった支店網が広がっていたこと、またそうした華僑商人の活動に日本人が参与していたという点が興味深い。呉植垣は残念ながら一九一四年四月二六日、享年五二歳にして癌のため横浜にて死去した。

同春号主人黄銳昌

二通の書簡がある。一通は一九二一年六月一二日、長崎の泰益号に宛てられた



図1 呉植垣『横浜貿易新聞』大正3年4月28日号より

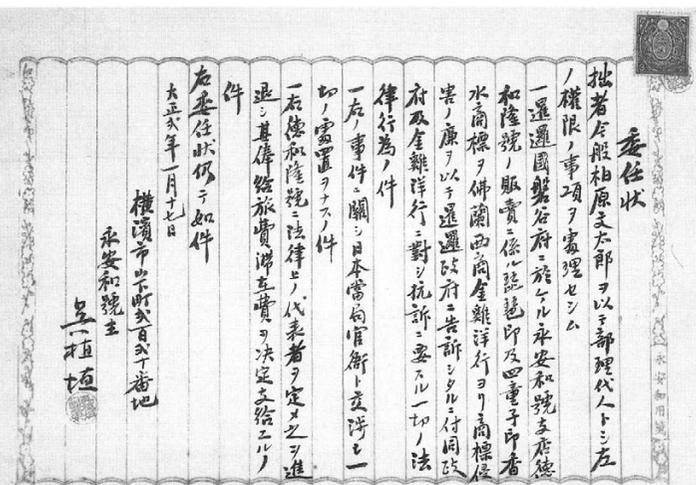


図2 徳和隆の商標侵害裁判における柏原文太郎の委任状 大正2年1月17日 (成田山霊光館所蔵)

「山手外国人墓地に眠る人びと」展余話

失われた墓標——シモンズ博士の場合

山手の外国人墓地の被葬者数を四千五百余とするのは、受付簿の通し番号にもとづいている。関東大震災によって、それ以前の受付簿が焼失したため、すべての人の名前がわかっているわけではない。現在確認されている墓標の数は約二千五百、夫婦・家族の合葬を考慮に入れても、かなりの数の墓標が失われたことになる。大半は震災の被害によるものと思われるが、他へ改葬されたケースもある。前号で紹介したように、受付簿のうち第二冊目と推定されるものが、好運にも難を逃れて現存している。これは墓地に残された唯一の原資料であり、展示にも出品させていただいた。その中の受付番号一四八に見えるアメリカ人医師シモンズ(Duane B. Simons)の場合は、改葬の事実が明らかである。



シモンズ
『開港七十年記念横浜史料』

シモンズは横浜開港直後の一八五九年(安政六)十一月一日、アメリカン・ダッチ・リフォームド・ミッシェンの宣教師として神奈川県にやってきた。

他の宣教師とは別に宗興寺に住み、翌年の春には横浜居留地で診療を始める。

神奈川からの往診と思われるが、医療伝道というより普通の開業医のような生活を始めたのである。一〇月には外国人貸長屋を譲り受けて横浜に転居、二七日付で上海の新聞「ノース・チャイナ・ヘラルド」に開業広告を出し、翌年春には居留地八二番に借地を得ている。同僚のプラウンによれば、シモンズ夫人は商人達と同じように、ダンスやカルタをして派手な生活を送っていたという。それがシモンズの行動の理由だというのがおおかたの見方だった。一八六二年初めにはミッシェンから離れる。そのうちに夫人が帰国してしまった。結局シモンズは借地・建物を売却し、ミッシェン本部に來日時支度金を返済した。翌年五月には上海へ向かい、しばらく滞在のち、一八六四年九月、帰国の途について。

五年後、彼は再び日本にやってくる。その間フランスとドイツで医術の研鑽を積んでいたのだという。明治三年、腸チフスに罹った福沢諭吉を救ったことから両者の親交が始まる。五年には横浜の仮病院に招かれて週一回勤務、翌年から常勤医となった。後の十全医院、現在の横浜市立大学医学部病院の前身である。一三年に退職、その際勲五等双光旭日賞を受賞、一五年に帰国

した。その途次、紅海上の船中から福沢宛に「日本は小生の為には第二の故郷」と書き送っている。

それから四年後、彼はみたたび日本にやってくる。今度は夫人ではなく、母親と一緒に。彼の死去の際の『ジャパン・ウィークリー・メール』(二二年二月二三日付)の追悼記事には、大要次のように記されている。

「彼は一八五九年に來日して以来、二三年間にわたって天職に邁進し、医師と親切な態度と惜しみない慈善活動によって、あらゆる国籍の人びと、とりわけ日本人の間で賞賛を得た。一八八二年の帰国の際、すでにプライト病を患っており、再び日本を訪れるつもりは無かった。しかし、この国の魅力が磁力を働かせたのであった。陽光のふりそぐ国土と興趣豊かな人びとに、あらがいがたく引かれることを感じた彼は、一八八六年再びここにやってきた。年老いた母親とともに、余生を彼の愛する土地に捧げる覚悟で。」

福沢は慶応義塾構内に家を立ててシモンズ母子に提供した。折しも一六年に鹿鳴館が開設され、一八年には福沢が「脱亜論」を公表するなど、欧化に脱亜入欧の気運が高まっていた。やがて藤山雷太(政治家藤山愛一郎の父)の翻訳により、欧化主義を批判して日本の伝統文化を称揚するシモンズの論説が『時事新報』紙上に登場する。「日本社会論」(二〇年九月三日、五日付)「日本の美術及び衣服」(二二年四月二三日、二五日、二六日付)等々。

後者では大意次のように主張している。「日本の文明は欧州の文明に比して、種類こそ異なれども、精神に於いて譲るところなきのみならず、かえって上品なるものなり。西洋の文明はもっぱら盜賊の働きを示し、弱肉強食を常となし、傍近の小国を征服して獸欲を逞しくし、その目的は我地を広め、我富を増すに有ることなれば、一人もしくは小勢にては、追い剥ぎ・切り取りと呼ばれるところのものを、ただ仕掛けを大きくしたに過ぎざるのみ。」

二一年には『ジャパン・ウィークリー・メール』(六月三日付)に、アメリカの一女性が大統領夫人以下の賛同署名を得て、「胸元をひろげ腰を締め付ける洋装は、道德的でも健康的でもないから、日本女性が模倣するのはやめるように」という忠告を投稿したのに意を強くして、「日本婦人の真似洋服」(七月五日付)を公表している。

二二年二月一九日、三田で死去。二三日に横浜のユニオン・チャーチで葬儀が行なわれ、山手に葬られた。受付簿には、行年五四歳、死因は腎臓炎、司式はコクラン師とある。その後日本は日清戦争に勝利し、条約改正を達成して脱亜入欧を遂げるが、この戦争には陰に陽に福沢が関与していた。真つ向から主義・主張の対立する両者だが、それによって親交が損なわれることはなかったらしい。東京青山墓地に改葬されたシモンズの墓には、福沢の筆になる立派な碑文が添えられている。

(斎藤多喜夫)

資料よもやま話

神奈川台場と松山藩士

—伊予史談会文庫の中から—

横浜開港資料館では開館以来、日本各地に残された幕末から明治・大正期の横浜に関する古記録の調査を実施してきた。また、そうした調査の過程で貴重な資料が発見され、従来分からなかった横浜の歴史が明らかにされることも多かった。今回、紹介する資料もそうしたものの一つで、愛媛県立図書館が保管する神奈川台場に関するものである。神奈川台場とは神奈川宿に置かれた砲台のことであるが、一般の市民の方には馴染みが薄いと思われるので、まず神奈川台場について簡単に触れておこう。

東京湾内に台場が築かれるようになったのは一九世紀に入ってからで、西欧列強の「黒船」が日本の沿岸に頻繁に姿を見せるようになってからのことであった。この時、幕府は防衛のため諸藩に対し海岸の警備と台場の築造を命じ、各地に台場が作られていった。神奈川台場もそうした状況下で現在の愛媛県松山市に城地を持つ松山藩によって築造されたものである。ちなみに、幕府が松山藩十二代藩主松平勝善に東京湾内の警備を命じたのは安政元

年(一八五四)のことで、これ以後、この藩は「首都」である江戸の防衛に大きな役割を果たしていくことになった。また、安政四年(一八五七)には十三代藩主勝成が幕府から神奈川宿(現在、神奈川区)一帯の警備を命じられ、この藩は翌年、神奈川宿の獵師町に台場(神奈川台場)を建設している。こうして神奈川台場が作られ、慶応二年(一八六六)に幕府が松山藩の任務を免するまで同藩による台場警備が続けられた。また、台場では連日のように松山藩士による軍事訓練が実施され、横浜開港後、この台場は居留地に最も近い砲台として外国人に威圧感を与えていたといわれている。

ところで、この台場の石組みは現在でも一部分残っており、当時の姿を伝えている。しかし、この台場に関する文献資料はたいへん少なく、台場の絵図面(横浜開港資料館所蔵)や松山藩士が明治末年になって語った回顧談(大正元年、史談会発行『史談会速記録』)、幕府が松山藩に台場築造を命じた際の関係書類などが知られているにすぎない。そこで今回、愛媛県立図書館が保管する松山藩関係資料の中に神奈川台場関係資料が含まれていないかを調査することになったのである。調査した資料は「伊予史談会文庫」と呼ばれ、同史談会が所蔵し愛媛県立図書館に保管を委託しているものである。同史談会が所蔵する史料は約七千点で、史談会が設立された大正三年以降、史談会が収集したものである。今回の調査は三日間にわたって行われ、その結果、数点の神奈川台場に関する資料の存在が確認された。そこで、ここでは、その中から台場の警備を担当した藩士の日記(『江戸往還記』)を紹介してみたい。

この日記は文久二年(一八六二)に書かれたもので、この日記を記した藩士は藩の命令で松山を出発し、江戸屋敷に到着後、神奈川台場に赴いている。日記は正月二十日に松山を出立する時から始まり、道中の様子や江戸藩邸に到着した時の模様、神奈川台場での生活ぶりが毎日記されている。残念ながら筆者の名前が日記にないため、誰が書いたものか特定できないが、貴重な記録であることには変わりはない。紙数の関係で全部を収録できないが、いくつかの箇所を抜粋して掲げておきたい。

【資料】
文久元年
正月廿日、晴、夕刻雨
一、卯刻、松山出立、三津口江控揃、辰刻、舩形二面乗舩、暮方より風強く同所滞舩

同廿一日、曇
一、辰刻頃より北風、追々相察、折々ソハエアリ、又々滞舩
一、朝、山本家来出掛、宿元江一筆相認送ル、早速通シ、未刻過正余り呉夫々否承知安意ス、其節左之品持来ル、菓子・飯給サセ、申刻過帰ル、又々浜宿元江一筆相認為持返ス
同廿二日、晴
一、辰刻過、舩形出帆、又々北風吹出シ、マキレニ面巻、中刻過、漸興居嶋由良滞舩、夜中よりスコシナグ
(中略)
同廿九日、晴
一、辰中刻頃、日比出帆、赤穂御城目近く見エル
二月朔日、晴
一、卯中刻過、エガサキニ面汐待、凡八里、巳中刻、同所出帆、申刻過兵庫江舩揃、凡六里、即刻同所出帆、戌刻過、大坂川口拾番迄ユク
(中略)
同十五日、晴
一、卯中刻、神奈川御陣屋江行、一統廻勤諸々拜見ス、又宿江掃り支度致シ辰刻過同所出足、川崎より乗駕、午刻品川釜屋三行、昼支度、一統旅服ヲ着シ同所立、夫より三田御中屋敷御門内迄行、石原元右衛門、明日出立ニ付呼出シ一寸暇乞シ、左之二品相頼置、直様御上屋敷江行、御殿江出、彼是夕刻ニ相成、御家老、其外勤番分計廻勤

致ス、又心易向出懸有之、酒・さ
かな差出ス、御小屋ハ北側

神教丸壹封、有松絞壹封

一、一統御番方被仰付

一、浜宿元より之書状届来ル

(中略)

六月十日

一、前記二付、五時過より御上屋敷江
行、已刻奥平清記殿御小屋江罷出

候処、左之通被仰渡候

一、當時神奈川御台場詰被仰付演説

一、当春より神奈川御固場詰惣堂府持
被仰付候処、此度同所異人宿寺御

固場詰之内ニ而警固之儀御達有
之、地盤堂府方御人少之上、右等

之儀有之候而御人配御差支之儀
有之、無拠此度勤番之面々江御台

場詰被仰付候儀ニ付、當時之御場
合能々相弁、別而謹慎ヲ加工相勤

可申候

御目付より左之通書付相渡ル諸
仕成

一、沓番方之者、明後十二日出立之事
但、十日詰、當時左之日合、沓番

より順ニ交代之事

一、□方より交代罷越候節ハ極早朝よ
り出立、可成丈早ク御台場江罷越

先詰之者と交代、先詰之者直ニ出
立帰足可致事

右交代相済候ハ、御固場詰御目付
江可申届事

一、出立前日・帰足翌日休之事

一、病氣・故障等無拠儀有之、外組合
と頼合不苦、其訳御目付江可申達

候事

一、御小屋道具堂府方之通御貸ニ相成
候事

候事

一、此度ハ御台場詰被仰付候儀ニ付、
御門出不相成、用弁等ニ家来差出

候儀は不苦候得共御持場柄之儀別
而謹慎宜罷在候様急度可申付候、

刻限等常府之通ニ有之候事

(中略)

七月十一日、曇、神奈川江出立

一、早朝ヨリ出立之処、六合川出水ニ
付、馬止之様相聞見合ニ相成居、

五半時過、川明之旨政田屋より申
参り御上屋敷達も出懸有之、即刻

出立、鮫洲川崎屋ニ而昼支度、七
ツ半時頃、神奈川江着、同所御陣

屋江出、御目付江相届、直ニ御台
場ニ而交替

一、夜五ツ時・八ツ時、両度御砲台打
廻り致候様御目付より沙汰有之趣

申次ニ付、当夜石川又兵衛相勤ル
(中略)

同十三日、雨

一、昼飯後、あさり取ニ行、七ツ前よ
り船稽古ニ出ル

一、夜、両度御砲台大手打廻ル
(中略)

同十五日、曇

一、今明兩日、御用透ニ付、横浜江同
伴致候間、早昼より御陣屋迄出懸

候様御目付中島利右衛門より申来
ル、右ニ付、日野・杉浦・今井三

人達立、四ツ半過より御陣屋迄出
ル、同氏同伴、神奈川より船ニ而

横浜江行、異人屋敷・遊所・其外

見物シ唐物品々相求メ弁天前太田
屋ニ而支度ス、日之入頃同処出足
又舟に而暮過御台江帰ル

同十六日、曇

一、八ツ後、御台場内海ニ而はせ十四
五釣ル
(中略)

同廿一日

一、八ツ時前交代、早刻出立、不快ニ
付、神奈川より品川迄駕ニ乗、鮫

洲川崎屋ニ而支度ス、夫より歩行
五ツ半頃、三田へ帰ル、御目付石

塚重入江相届、御番役伊藤三右衛
門江五人老紙ニ而同断、御上屋敷

御広間御目付江之届ハ水野江頼置
(後略)

日記によれば、筆者は本来江戸屋敷
に詰めるはずであったが、台場の警備

人員に不足があったため、神奈川宿へ
赴いたようである。また、警備にあつ

ての規則が日記に記されているほか、
休日に横浜を見物する様子が詳しく記

されている。幕末の横浜といえは商人
たちが活躍する場所をイメージする

が、実際には日記の筆者のような武士
たちも多数横浜を訪れていたのではあ

る。諸藩の武士たちが、国際港横浜で
なにを見、なにを感じたのか、興味深

い問題ではある。

(伊予史談会文庫の調査に際しては、
伊予史談会会長景浦勉氏、同会員熊

谷正文氏、松山大学教授岩橋勝氏、愛
媛県総合教育センター清水正史氏に大

変お世話になった。末筆ながらお礼を
申し上げたい。)

(西川武臣)



明治30年代に撮影された神奈川台場跡

閲覧室から

前回に続き、明治・大正期に横浜で発行された雑誌の複製のうち、当館で原誌を所蔵するものを紹介します。閲覧票で請求の上、ご覧ください。

『神奈川県商工時報』（神奈川県産業部商工課発行）

本誌は、神奈川県下における商工業ないし貿易に関する事項の調査、統計報告、及び在外公館、商務官より通報する海外市況、商品等についての報告



資料館だよ

▼展示

(1) 「横浜中華街——開港から震災まで」 11/2、平成7年1/29 居留地最大の人口を擁し、特色ある市街を形成した横浜華僑の事績を紹介し、幕末から大正期頃までの中華街の歩みをたどる。

▼講座

「横浜中華街——開港から震災まで」

展開連講座 11/12、19、26、12/3、10 いずれも土曜日で午後二時から

(二時三〇分開場、二時開講) 会場

その他を編集し、営業者並に関係者の参考資料に供することを目的として、月一回発行された。

当館では、五号（大正一二年六月）を所蔵している。この号の付録には、神奈川県会社名簿として、横浜市内の株式会社八六社の事業、資本金、重役筆頭者、本店所在地等を取めている。

『神奈川県水産会報』（神奈川県水産会発行）

大正一〇年に水産会法が制定された。目的は、水産会が官庁と水産業者との間に介在し、当業者の志望を達成させ、一方では産業政策を徹底させることにあった。これに従い、神奈川県水産会は、同年一二月に設立の許可をうけている。本誌はその会報で、漁業に関する論

当館・講堂 講師及び演題（開講順）

濱下武志（東京大学東洋文化研究所教授）「アジア史にみる華僑・華人問題——18世紀から20世紀」、籠谷直人（名古屋市立大学助教授）「神戸華僑と戦前期の日本の工業化」、伊藤泉美（横浜開港資料館調査研究員）「横浜中華街の形成」、帆刈浩之（東京大学大学院「運楯ネットワークと華僑——横浜・香港・広東」、斯波義信（国際基督教大学教授）「日本における三江幫——函館の華僑について」

受講料 二千五百円 先着八〇名（往復葉書でお申し込みください） 申込先 〒231 横浜市中区日本大通3 横浜開港資料館講席係

説及び資料、本会記事、雑報等で構成されており、巻頭に漁業組合の様子や横浜市中心卸売市場、催し物等の写真を数枚載せている。

当館では、七号（大正一四年三月）と二二号（昭和六年一二月）から二四号（昭和九年一二月）までを所蔵している。（ただし、二二二号は複製のみ所蔵）。

『日本貿易雑誌』（横浜貿易新聞社発行）

横浜市南仲通五丁目九〇番地の横浜貿易新聞社から発行された。一編一号に寄せた同社社長小林梅四郎の「日本貿易雑誌の発刊に就きて」によれば、外国商人に対する日本人商人の商権回復、貿易品生産者、貿易商人への情報提供等を専門にすることを、発刊の目的としている。内容は、社説、論説、

▼寄贈資料

(1) 数学教授本（巻4）ほか 二二点（鶴見区鶴見・島方梅氏）

(2) 星野奇旧蔵横浜開港公園資料 九一点（山梨県大月市 星野三郎氏）

(3) 記念絵はがき三枚一組 一点 道路地図等 五点（南区南太田町 増田好夫氏）

(4) 近代政治史・外交史関係文献資料 七、二二六点（藤沢市辻堂東海岸 稲生典太郎氏）

(5) 絵葉書 五七点 アサヒグラフ 第6巻22号大正15年5月表紙1枚 大震記（日本評論社）大正12年10月（茨城県竜ヶ崎市松葉 河本創作氏・旭区万騎が原 宇野原肇氏）

海外報告、雑録、文苑、雑報、金融及貿易の景況、官令で構成されている。当館では、一編一号（明治二六年一月）、一編二号（明治二六年二月）を所蔵している。

『農魁新誌』（殖産園発行）

横浜市戸部町一丁目二番地にあった殖産園が発行した月刊誌。当館では、一号（明治三七年一月）を所蔵しているが、その内容は農業に関する論文と稲及穀類、野菜、草花の種子、果樹の苗木等の販売広告が大半をしめている。同様の雑誌に『農事新報』（農事新報社発行）がある。これには、東京の日本種苗株式会社が販売する種苗及び農具、家畜等をイラスト入りで掲載している。当館では、二号（明治四〇年七月）を所蔵している。（上田由美）

▼寄託資料

(1) 江戸時代のキリシタン高札 一点（神奈川県神奈川郡 佐々木隆一氏）

(2) 三丸興業株式会社所蔵資料 九八二点（中区住吉町 三丸興業株式会社）

●入館者100万人を達成

昭和56年6月2日の開館以来、当館の入館者が、10月6日（木）の午前9時55分100万人に達成した。100万人目になったのは東京都大田区立大森第3中学1年、白木和幸さん（12）で、物部館長から花束と記念品が贈られた。（詳細は次号で）